

巻頭の辞

駒沢大学仏教学部長 榎 林 皓 堂

ことし、本学が創立八十周年をむかえ、盛大な祝賀行事がおこなわれることは、まことにおめでたいことである。しかし創業からかぞえると、三百数十年もたっているわけで、なかなか古い。古いという点では、だんぜん群をぬいているだろう。むしろその間、さまざまなことがあり、消長もあり、敷地もなんべんとなく変ったが戦後、新制大学にきりかえてからは仏教、文学、商経の三学部からなる総合大学となった。宗門の子弟教育だけを目ざした専門学校時代にくらべると、たいした飛躍発展である。学生数もぐっとふえた。宗教信仰を基盤とする人材養成という点からは、文学部、商経学部の併置は重大な意義がある。戦後アメリカでは機械文明にウンザリしたあげく、東洋的なるものに注目し、騒々しさのなかに静寂をもとめる禅仏教が、脚光をあびることになったが、本学においても、一般子弟で仏教学や禅学を志望し、それを専攻しようとする学生諸君も相当いる。また仏教精神を基盤とする教育方針に注目して、子弟を入学させる父兄もだいぶいる。そしてそれは逐年増加の傾向にある。

しかるに宗門子弟の方はどうかという点、寺院に生長したから仏教学をやるというだけで、仏教に情熱をたぎらせ、これをこそ我が生きる唯一の道となす、という如きものが案外すくないのではないかという気がする。そ

んなことでよい筈はないが、概して、寺院に生れたという宿命になんとはなしに引きずられ、無意識についてゆく、というかたむきがありそうだ。宿殖善根力に引転せられるなどと考えているものは、おそらくあるまい。もちろんそうしたことは大学入学後、教えられ導かれて、はじめてそうした考え方になるのであるが、入学前における宗門子弟の宗門教育は、大抵のものがほとんど為されていない。それどころではない、仏教を学び宗教々師となるのを忌避する傾向も絶無ではない。一般子弟の方の求道心がおうせいであり、寺院子弟がその反対であるなど、全く皮肉なことであるが、それは宗教々師としての聖職性が、父兄から知らされていないからであり、父兄自身もやっつてることを聖職と感じているかどうか、そこにも問題がある。自分自身が聖職と思ってもせぬのに、子弟にだけそれを求めるのは虫がいいことになる。こうしたことでは大学がわで仏教学や禅学の時間を飛躍的にふやしたところで、宗門子弟がインスタントに道心者になることは期待しえない。

ところで仏教学部ことに禅学の在方であるが、いちばん大事なことは宗学の基本線が正確につかまれてゆくことである。護教だけの宗学はもう古すぎる。しかし破教宗学では宗学にはならぬ。訓詁礼讃のマンネリ宗学も新鮮さはないであろう。が、配置転換の宗学も權威を働いしない。では曹洞宗学の基本線はなにか。『随聞記』に「無所得、無所悟にて、端坐して時をすごさば、すなわち祖道なるべし」と道元禅師はいう。そんなバカげたことがあるもんか、とおこったり、宗門教学の立場をすてる人もいるが、宏智のことばをかりて云うならば、只管打坐は「淡中の味」であって通人でないかぎり、真味はわからない。それは、かめばかむほど出る味であり、底しれぬ深い味である。自家の宝蔵を放っぽりかえして、憐珍を数えるなど、もちろん感心したことでないが、根源に透徹することなくして、応用面だけに専念するのも正しいものではない。